



「ヨーロッパを廻らないか」の誘いに…

間の旅である。  
親戚の村松健  
児さんが東海大  
学の教授をして  
いて、たまたま  
フランス・ナン  
シーの研究所へ  
派遣されて行っ  
ており、「明さ  
んが退職したの  
だから、是非一

緒にヨーロッパを廻らないか」との誘いがあつた。わたしは今まで国内の一泊二泊の小旅行には行っていたものの、二十日間も家を留守にして外国に行くのは初めてであつた。  
期間は平成元年十二月二十日から平成二年一月十日まで。東京の上野に前泊し、翌二十一日成田空港十二時の便でパリのシャルドゴール空港に向かつた。  
機内では静かに腰掛けていればスチュワーデス（現在はキャビンアテンダントというらしい）が順に飲み物や美味しいお食事を運んで下さる。モスクワを経由のこの飛行ルートは太陽を追って飛ぶので、モスクワまでの十時間程は外は明るく、雪に覆われたシベリヤの広大な景色を見つつ、隣りに座ったパリへ十日間の旅をするという二人の女子大生と楽しく話し快適に過ごした。シャルドゴール空港へは十三時間程のフライトで到着した。  
空港へは健児さんの出迎えを受け、郊外電車で三十分程乗り、パリ東駅前のホテルに落ち着き、

勤めている間は健康であつたが、退職後は病気や怪我が続き、飯田病院へお世話になつた。七十歳頃から難病の潰瘍性大腸炎となり根絶治療が無いので投薬を続け、その間チェンソーで足を怪我したり、耕耘機に挟まれたり入院もし、平成十四年には前立腺ガンが見つかり東京で放射線治療を試みたり、その後も、膀胱腫瘍、間質性肺炎など病み続け、だんだん無理が出来なくなり、二十年八月最後の入院、九月二十三日夜、呼吸が旧に苦しくなつて、その夜遅く遂に亡くなつてしまつた。主治医の原繁樹先生は立ち合つて下さり、わたしと娘は見送ることができたが、駆けつけた息子家族は間に合わなかつた。  
生前「戒名もお経も要らぬ」と言い残していた故人の遺志にしたがつて、葬儀は「お別れ会」形式で行つた。唱歌が大変好きだったので、文部省推選というような歌を会葬して下さつた大勢の皆さんに歌っていただいた。我が家の上の松井きみ子さんがコカリナを吹いて下さり、関靖さんもアコーディオンを奏でて下さる中、高陵中学校での教え子の皆さんが大勢参列下さつて校歌なども歌ってくださつた。またお別れの言葉を同僚であつた先生、高陵中学「追懐」級の代表金森さんからいただき、四人の孫たちも涙ながらに述べることができ、心に残るお別れ会だつた。

## 第六章 旅の日記

### ヨーロッパ二十日間の旅へ

祖母は勿論母も長旅などしたことはなかつたが、わたしは、子どもも大きくなり主人が退職して時間がとれるようになってから、海外の旅に、二人で何回も行かせてもらった。

今一番思い出されるのはヨーロッパへの二十日

ホテル横のレストランで夜の晩餐となった。  
以下、旅の日記を記す。

十二月二十二日 ノートルダム寺院とセーヌ川

年末の頃のパリは朝九時にならないと明るくならない。

地下鉄に乗り、まずノートルダム寺院を訪れる。見事なステンドグラスにみとれる。ノートルダム大聖堂として改築を始めたのは一六三三年、完成したのは二〇〇年近く後の一三三〇年、塔の雄々しさは中世の人を驚かせたと言う。収容人員九〇〇〇人というスケールの大きさに驚かされる。

荘重なパイプオルガンの演奏を聞きつつ、螺旋階段を屋上へのぼってみた。南塔には鐘、その重さ十五トンという。屋上からパリ市内を望む。それから小雨の降る中セーヌ川のほとりや整ったパリ市内を歩き、十七紀ルイ十三世の王宮として建てられたと言うパレロワイヤルに立ち寄る。気温は割合に温かで、イルミネーションが美しい。道



ルーブル美術館で

れる。

それから有名なルーブル美術館を訪れる。収蔵数三十万点という。玄関前広場に、来年（一九九〇年七月十四日）に迫ったフランス建国二〇〇年の祝賀に

先立って造られたガラスのピラミッドがある。ここから地下へ入った。地下は各館連絡通路となっており、レストラン、売店など、機能的に作られている。冬のためかどこも観光客は少なかった。

二十四日 ベルサイユ宮殿

パリ郊外電車に乗り、パリの南西二十二キロに位置するベルサイユ宮殿を訪れる。入館料十二フラン。宮廷内はバロック建築の豪華絢爛たるも

を駅前ホテルに戻る。

二十三日 凱旋門とシャンゼリゼ通り

朝食前、地下鉄で凱旋門を訪れる。一八〇六年ナポレオンがオステルリッツの戦いに勝利を収めた後、栄光を称える目的で建立したという。しかしナポレオンは一八四〇年遺骸となって無言の凱旋。一九二〇年以来門の下には無名戦士の眠りを守るように不滅の火が灯っている。凱旋門上から眺めると、十二の放射状の通りに沿う町並は大変美しい。邪魔なものはすべてとり除き図面通りにパリ改造をしたという。

凱旋門よりマロニエの並木道シャンゼリゼ通りを歩いてホテルに戻り朝食。

その後、近くのコンコルド広場へ。フランス革命の時ルイ十六世をはじめ一三〇〇名の血を吸った断頭台がここに置かれ処刑場となった広場である。今は調和の広場で、エジプトから贈られたというオベリスクを背に写真を撮る。一八八九年の万国博を記念して建てたエッフェル塔が遠く望ま

の。庭園も幾何学模様になられ広大。二フランで庭園内を車で廻れる。六月の花咲く頃はさぞ美しいだろう。

宮殿の建設は、水も土もないベルサイユの沼地に遠方から土を運び、セーヌ川から水を引く大事業で、「毎晩荷車一杯の死人を出すありさま」という工事が四半世紀に及んだという。ルイ十四世の時、宮廷はルーブルからベルサイユへ移った。ここで王は放蕩、贅沢三昧。夏には毎晩のように

祭典が催され、訪れた民衆はバレエや舞劇に酔いしれた。フランスが全ヨーロッパに君臨した時代であった。

わたしたちが訪れたのはクリスマス・イヴだったが、市内は



朝のベルサイユ宮殿と健児さん

いたって静かだった。パリのお寿し屋さんでクリスマス・イヴを祝う。客のフランス人は英語が話せたので、会話が通じた健治さんと主人はご機嫌になり、住所のメモなど交換していた。

二十五日 レンタカーの旅はじまる

今日からはいよいよレンタカーの旅が始まる。国際免許を取得している人は健児さん一人なので、これから一月八日まで健児さんがドライバ―。骨を折らせることになる。

午前中に車借用の手続きをし、これからは地図を頼りに、健児さんはフランス語、主人は英語を使って（二人ともあまり確かな会話ではないが）行く先々で通貨を変えたり交渉しながら行くことになる。

地図を頼りにエツフェル塔脇を通り、ブローニューの森まで行き、一休み。湖水には水鳥がたくさん泳いでおり美しい。ベルギーの商社に來ているという日本人の若い夫婦に逢う。車の旅は楽だ。わたしは後の席に一人座り快適。ベルサイユ

に泊る。

二十六日 ジャンヌダルクの都市オルレアンへ  
健児さんは午前中ベルサイユの研究室へ行ったので、わたしたちは二十四日に見られなかった側のベルサイユ庭園をゆっくり見学した。

午後は一路パリから南へ、ロアール地方の緑の平原を一三〇キロ走り、ロアールの主要都市オルレアンへ入る。一三三八年に始まった英仏一〇〇年戦争の時イギリス軍に二〇〇

日も包囲されていたのを十日で解放したという、救国の乙女ジャンヌダルク像が駅前立っていた。ジャンヌダルクは、「オルレアン



ジャンヌダルク像

乙女」(la Pucelle d'Orléans)とも呼ばれるフランスの国民的英雄で、オルレアン解放後、シャルル七世をランスで戴冠させ、フランスの勝利に寄与したとされる。しかし、コンピエーニュの戦いで捕虜となり、宗教裁判で異端者と断罪され、ルーアンで火刑になった運命の女性だ。

そんな歴史に想いを馳せながらオルレアンの整然とした町並を見、町のシンボルである美しい教会のサントクロワ寺院を訪れる。鐘が鳴り響き中では夕方のお祈りが始まっていた。観光客は静かに自由に入れる。その日はオルレアン郊外ロワール川支流近くの小さなホテルに泊った。

二十七日 ロワール地方の城巡り

朝起きたら裏の川に白鳥が十羽列をなして泳いでゆく。朝九時三十分、車に一四一フラン分（一フラン＝二十四円）のガソリンを入れ、いよいよロワール地方の城巡りに出掛ける。ロワール川流域はパリに王宮が移る前、政治、文化の中心であり、諸侯、貴族の館が八十程残っている。

まずロワール最大の城シャンボール城を訪れる。観光客は殆どいなかったが、そんな中でも日本人の学生ツアーのバスに逢った。城は狩りと美人が好きだったフランソワ一世が建てたルネッサンス様式で、各階外側に回廊あり、森の向こうまで庭園となっている。

城を見終えて近くの市場で食料を買い、次にシユヴェルニュー城へ。十七世紀シユベルニュー伯爵によって建てられた近代的な雰囲気のある城だった。この間、主人がカメラを落としたことに気づき、引き返すと近くの農家の人が拾ってくれ、その家族と写真を撮るなどというハプニングもあった。

天気は連日快



シャンボール城を背に



サグラダファミリア教会

晴、次にプロワ城を見学。一四九八年、ルイ十二世即位以来一〇〇年に亘ってフランス政治の舞台となった。この城から夕暮れのロワール川を望んだ。城のすぐ下の土産品店の主人は、何年か前に日本を訪れたそうで、鎌倉の大仏前で撮ったという写真が飾ってあった。城の見学料は三人三カ所で一九八フランだった。

プロワ市内でパンと美味しい生ハムを買い、インフォーメーションへ寄り、ここから夕暮れの道を一路ポワティエまで三時間走り、その日はポワティエ泊り。

### 二十八日 サンセバスチャンのスペイン料理

ピアリッツの海岸に沈む美しい夕日を見、国境を越えて、スペインに入る。

フランスの広大な田園風景から一転、ピレネー山脈の端が見えて来て、スイスを思わせる。緑の丘陵に家が点在する景色に変わり、大西洋岸の観光地サンセバスチャンに入る。

スペイン料理の美味しいという大衆的なお店で

徒が建てたアルジャファリア宮殿見学、パシカレイデイ教会前では夕暮れても祈りを捧げる人が大勢いた。その日はサラゴサ泊り、夜のテレビで日本の九州の農協の事が放映されていた。

### 三十日 オリンピック開催地バルセロナ

地中海沿岸、今度のオリンピック開催地バルセロナに向う。ポツンポツンとある家は隣組などという訳には行かないだろう。広大な土地に人口は少ないのだから殆ど車は走っていない。オリープ畑か、やせたような果樹園も見られる。バルセロ

夕食。日本に三ヶ月いたことがあるという人に逢う。みな大変陽気で、スペイン語は話せなくても、男性陣二人のフランス語と英語で結構通じて楽しい。

### 二十九日 宮殿と教会の街サラゴサ

サンセバスチャンよりサラゴサに向かう。緑の丘陵斜面に小さな家々が見える。羊の草食む姿もところどころに見られる。羊の放草地か麦だろうか、広大な緑、その中を高速道は続く。健児さんは「時速一四〇キロはヨーロッパでは普通」と言っている。車の数はまばらで家も見えず、農民はどこから来て耕すのだろうかと思議に思った。途中サラゴサとマドリッドへの別れ道をサラゴサへ。

サラゴサ市内は宮殿と教会に代表されるように三〇〇年はアラゴン王国だったと聞く。

観光客は殆どいないこの町では、観光客が珍しいようで、子どもたちがとても好意的に手を振ってくれ、カメラにニコニコと応じてくれる。回教

ナ市内は地中海側で気候が温暖なのだろう、真冬なのに広葉樹の街路樹には葉がついている。市庁舎前のお花が奇麗だ。

地方が変わり国が変わる毎に珍しいことばかり。ピカソ美術館とサグラダファミリア教会見学。ピカソ美術館には見学者が多く、日本人の観光ツアーの人たちもいた。聖ファミリア教会は十九世紀の有名なアントニ・ガウディの作。一〇〇年前に建て始め完成までにまだ二〇〇年ばかりかかるといふ。未だ建設中の中天に聳える何本かの塔は、彼自身がとうもろこしのようだと聞いたとうが、まさしくがらんとするとうもろこしのよう。

どこの国も日本と違い、のどかな感じを受ける。子どもたちは街のちよつとした広場でローリースケートを楽しんでいたりする。

ヨーロッパのよいレストランは九時すぎより食事が始まるところが多い。ホテルを決めてから、周辺を少し歩いてよいレストランを探し、食事をする。健児さんはワイン通で、ゆっくりワインの



夜遅くまで食事を楽しむ

味を楽しむ。夜遅くまで食事を楽しみ、ホテルに帰ってから明日はどの道を走ってどこまで行くかと地図を広げミートイングが始まる。今日はバルセロナ泊り。

### 三十一日 ペルピニャンへの山道

今日大晦日はペルピニャンまで走ることとする。健児さんは途中で小国ながら充実しているというアンドラ国へ寄って行きたいと主張するけれども、予定の日程がこなせないからと止めて、再びフランス領ペルピニャンまで走ることとする。バルセロナ市内をゆっくり走る馬車や闘牛場を横目に、サンツ駅で通貨を替えパンを買い、ペル

ピニャンへの山道を走る。ところどころ町があるが、山また山の大半は木がなく、地肌が見えている。雪冠るピレネー山脈を望みつつ、本日の宿泊地スペイン色の濃い町ペルピニャンへ到着した。

### 元旦 アビニヨンの正月

星型の城塞に囲まれたマジョルカ王宮を見学しようとしていたが元旦のため休み。

心を残しつつピレネー山脈に別れを告げ、フランスに向け一路ひた走る。やがて地中海が見え、遠くに城も望まれ、美しいローヌ川に架かる橋を渡り、城壁に囲まれたアビニヨンに入る。

坂を登り、中世の一期一〇〇年に亘りローマ法王庁の置かれた宮殿を見学。庭園は日本人好み。宮殿よりローヌ川に架かるアビニヨン橋が見える。この橋はローヌ川の氾濫で真ん中よりプツンと切れている。古いフランス民謡「アビニヨンの橋の上で」（「アビニヨンの橋で、踊ろよ踊ろ、輪になって踊ろ〜」）で有名な橋。宮殿の広場にはメリーゴーランドがあり、子どもたちが楽

しそうに乗っている。

また、車を走らせニームの水道橋前に立つ。二〇〇〇年も前に古代ローマ人がユゼスの水源から五〇キロもあるニームまで一日二万立米（ $m^3$ ）の水を運んだと言う。高さ四九メートルの水道橋の上にも登れるばかりか、現在は水路が見学通路に、三層式の最下層のアーチ上は道路になっている。古代ローマ人の技術に驚嘆するばかりだった。今日はアビニヨン泊り。行く先々インフォメーションで安い一つ星か二つ星のホテルを探して泊り、夕食はその地のなるべく珍しい料理をと、ホテルの外で食べる。

### 二日 ニースの海辺

アビニオンをあとに映画祭で有名なカンヌを経て、地中海沿岸マルセイユ、ニースの海岸に着いた。世界中の金持ちが集るといふニースの海岸はの海は青く美しい。白い水鳥もたくさんいる。海岸沿い三・五メートルの大通りには、超一流ホテルが立ち並ぶ。市内の銀行でイタリア、スイス両

通貨に替えた。

今日の移動距離は長く、この後モナコから山道に入りイタリアへのゲートを通りトリノに入った。スイスの山並みに沈む夕日は美しい。日没は五時、これからあのモンブランの麓までさらに四時間走る。初めての道、しかも夜道を、健児さんが頑張って運転してくれる。午後九時過ぎ、クーラーメーヤーに着き、小さなコテージに泊る。

### 三日 見上げるモンブランの峻峯

コテージで迎えた朝は快晴。昨夜は暗くて景色が分らなかつたが、モンブランの峻峯が手にとるように見える絶景に感嘆した。

これからスイスへの道。例年だと積雪一〜二メートルとのことだが、今年は道路に雪はない。モンブラントンネル手前がイタリアとスイスの国境だそうだ。

スイスに入り、スイス駅辺りを車中から見学。トローリーバスが走り綺麗なイメージのレマン湖周辺は霧で遠くが見えず残念。それでも丘陵の畑は

整然と耕され、レマン湖の澄んだ水は心を癒してくれた。時々休憩をはさみながら、健児さんの下宿のあるフランスのナンシーまで走った。夜になって真つ暗な道を健児さんはスピードを出して走り、わたしはまるで奈落の底へ落ちていくような思いで恐ろしかったが、健児さんの下宿へ九時三十分着、今夜はここへ泊めていただく。

#### 四日 アールヌーボーの世界を堪能

今日は落着いてナンシー市内を見学した。ナンシーはフランス東部ロレーヌ地方の中心都市で、パリからは電車で約三時間の距離。ロレーヌ公国の首都になり十五世紀にスタニスラス公が善政を敷いてからは城下町として発展した。ドイツとの国境に近く、過去幾たびか争奪的となり、戦禍に見舞われた歴史がある。機械、織物、クリスタルガラス（ドーム社は、世界的に有名）等の産業を中心に発展。十九世紀から二十世紀初頭にかけて世界に広く影響を及ぼした芸術運動アール・ヌーボーの中心地、発祥地として有名で、そ

のスタイルの建築物等が市内各所で見られた。

町の中心にはスタニスラス広場があり、十八世紀、ロレーヌ公の地位にあったポーランド王スタニスラフ一世の命令で、広場を、金具工芸でつないで、芸術品にしてしまった市庁舎、老舗ホテル、観光局などは壮観だ。広場の中心にはスタニスラス公の銅像があり、ほんとに金ピカだった。ナンシー派美術館にはエミールガレ、マジヨール、ドーム、プルーヴなどのガラス製品・家具、その他、アールヌーボーの素晴らしいコレクションがあり、アールヌーボーの世界を堪能した。この美術館に行けただけで満足だった。

健児さんの下宿はナンシー駅よりちよつと通りを入ったところにある閑静で古風な建物。庭には大きなマロニエの木があり、健児さんはこの最上階に住んでいる。強行軍の旅を終え、レンタカーを返し、夜、健児さんの手料理の酢さば、湯豆腐などの日本料理に舌鼓をうちながら、祝杯した。もう一晚、泊めていただく。

#### 五日 ドイツ・ハイデルベルクへ

今日は午後から森下雅春さんがドイツのデュッセルドルフからナンシーまで四六〇キロの道を迎えに来て下さり、ドイツを訪ねる予定だ。

午前中は、ナンシーの教会やロレーヌ歴史博物館をゆっくりと見学した。

午後、雅春さんが迎えに来てくれ、雅春さんの運転でドイツ・ハイデルベルクへ向かった。ドイツ最古の大学町の、十四世紀の建物というホテル・ホレンダホーフが今日の宿だ。

これからドイツの見学は、食事のこと、運転、訪ねるところなど、雅春さんに一切面倒を見てもらう。健児さんも運転を解放され、ヤレヤレという表情だ。ご苦労様。

ヨーロッパのレストランでの夕食はいつも豊かでゆつたり安らげるが、どこも照明が暗いので目が疲れる。

#### 六日 ハイデルベルク

ホテル前をネッカー川が流れる。

川にはカールテオドル橋が架かる。この橋を渡り、旧市街の反対側にある、蛇のようにくねくねとした勾配のきついシュランゲン小道は「哲学の道」と言われている。ゲートやニーチエをはじめ、多くの思想家や詩人が実際に思索にふけりながら歩いたという。橋の上に立つと、哲学の道の反対側の近くの高台にハイデルベルク城が建つ。この城を背景に記念写真を撮った。

その後、雅春さんの運転で、ハイデルベルク城を訪れる。赤い砂岩で作られた中世以来の古城。プファルツ継承戦争（一六八九年にルイ十四世の軍によって破壊、一六九三年に一部修復）で破壊されるまで、この城



ハイデルベルク城を背に



日本語の案内標識があった！

はプファルツ選帝侯の居城であった。プファルツ選帝侯の居城として代を重ねながら、拡張されて来たので、ゴチック、ルネッサンス、バロックなど各時代の様式が混じる堂々とした造りである。高い城壁よりハイデルベルク市内を見下ろした後、次の観光地フュッセンを目指す。フュッセン近くで昼食に立寄ったレストランの辺りは雪で真っ白だった。

今夜はノイシュヴァインスタイン城をどこよりも間近に望める山の町フュッセンの最高級ホテルへ泊る。お料理も美味しい。それでも一人一泊二食七〇〇〇円くらい。

七日 謎を秘めたノイシュヴァンシュタイン城  
ホテルのすぐ裏山上にあるバイエルン王ルートヴィヒ2世により建設されたノイシュヴァンシュタイン城を訪ねる。

この城は中世の古城のあとに建てられ、建設当時はノイホーエンシュヴァンガウ城と呼ばれていた。「ノイ」は「新しい」の意、「シュヴァン

トル」ヘドイツ側からケーブルカーで登る。日本人観光客が多いので日本語の案内標識がある。途中とところどころ樹木の間に湖が望め、見事な眺めである。頂上は快晴無風で、意外に温かい。白銀の山また山の眺めが絶景である。ドイツ、オーストリアの国境標識もある。頂上からは白銀の世界にスキーヤーが楽しんでいるのが小さく見える。

頂上レストランで贅沢な昼食をいただき、景色を堪能して下山。途中の麓の町の家々の窓がペンキで装飾されているのが異国風で珍しかった。今夜はローテンブルグ泊り。



ノイシュバイン城

ガウ」は「白鳥河口」の意味の地名で、名の通り白鳥のように優雅で美しい。ドイツニーランドのアトラクション「眠れる森の美女の城」のモデルになったというが、本当にお伽噺から抜け出たような優雅さであった。ちょうど雪が降り、快晴で、フランスで見て来た城とまた違い大変美しい。登りは馬車で、近いので雪の山道を歩いてホテルまで下る。観光客は少ないし山道など誰も通らない。途中木の間々から望む景色はあちこちに小さな湖が点在し、それは美しい。

その後、山頂がオーストリアとドイツの国境となっているツークシュビツク山頂(二九六六メー

### 八日 人形の町ローテンブルグの街歩き

旧市街が全長3.4キロの城壁で囲まれた中世の都市の面影を残している、人形の町ローテンブルグはどこのお店も奇麗な人形で満ちている。ホテルもカラフルな装飾の看板が掲げられていた。市長舎前マルクト広場に「市長の一气飲み」(マイスタートゥルンク Meistertrunk)の絡繰り時計があつてローテンブルグ名物になっている。

一六三一年、プロテスタントとカトリックという新旧二つのキリスト教の摩擦から起きた三十年戦争の時に、当時の市長が町を守るため將軍と賭け、そして十分間で3.25リットル入りの大杯を見事飲み干した。という由来がある。その絡繰り時計を見上げている人が何人かいる。わたしも見上げた。こんな風にしばらく楽しく町中を歩く。

それから霧にかすむライン川のほとりを走り、コンフレンツの「つぐみ横丁」で昼食。川沿いの丘陵に建つ城やぶどう畑を眺めて、ローレライの

岩も教えてもらい、まるでライン下りしているみたいで、楽しいドライブだった。

雅春さんに案内していただいた四日間のドイツの旅を終え、夜十二時レストランで食事をした後、デュッセルドルフの雅春さん宅へ落着く。健児さんが「御飯が食べたい」と言ったので、雅春さんが御飯を炊いて、お握りを作って下さり、お味噌汁もいただく。感謝。今夜は整頓された雅春さんのお住いに泊めていただく。

### 九日 異郷での出会い

雅春さんとお別れし、今日は、デュッセルドルフからベルギー経由の国際電車に乗りパリへ向かった。車窓からは、美しい緑の平原が広がる中にたまに草を食む牛・羊の群も見える。広々とした景色だ。電車は片側が通路で、四人一部屋のクシエット(男女同室の部屋)だった。

パリ市内では、柿ノ沢からソルボンヌ大学に学びフランス人と結婚してパリに住んでいるレトリと和子さんと、娘の高校同級生でやはりパリでガ

イドをしている松島良子さんと、オペラ座前で落ち合い夕食を共にした。主人と健児さんとわたしの三人はそのまま駅前ホテルに宿泊。

### 十日 夢のような旅の終わり

今日は男性陣と別行動。健児さんと主人はオルセー美術館を訪ね、良子さんとわたしは近くの和子さんのお住いを訪ねることにした。

和子さんは御主人と三人のお子様と五人の暮らし。日本の趣味で纏められたお部屋、工夫し整頓された台所に感心した。近くのレストランでチュニジア料理クスクスの昼食をいただいた後、二人にお別れした。



レトリと和子さん宅で、松島良子さんと

その後、健児さんと主人とに落ち合い、ドゴール空港まで送っていただいた。空港でこの二十日間の旅の間お世話様になった健児さんとお別れし、長く楽しい旅の記念にと少し買物をして機上の人となった。

機上から成田空港近くの景色が見え出すと夢のような旅が終わったのだと感慨深かった。

今回の旅は自分たちだけで計画しながら続けた旅で、夕方ホテルに着き、その地の特色ある食事をしようとして外へ出てレストランなどで夜遅くまで楽しみ、ホテルへ帰って地図を広げ明日の行程を決めるといふ作業をし、その時は大変だと思ったが、今想い出すと、どの旅よりも充実していた。